

がんになってどの患者もいろいろな面で苦しんでいる。「がん」「ガン」「癌」。非常に嫌な響き、なんとかそこから抜け出すことが出来ないだろうか。

私自身10年前にがんの手術で臓器を2つ失った。地元の益田日赤病院で左腎臓を、大阪成人病センターで膀胱を摘出した。それも2004年7月〜8月にかけて

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

「自分の治療はこれでよかったのか」

で連続手術だった。

家内と娘は私を見て、お父さんは「もうだめかも」と話しあっていたらしい。体重は20キロ減。見た目は元氣な自分ではない自分がそこにいた。さらに追い打ちをかけるごとく、慢性中耳炎で手術した。左耳の裏を剥がしての手術。意外と大きな手術だったようだ。保険金も驚くほど出たようだ。頭に近いからだろうか。

一時、気分が滅入り生きることが嫌になったことがあった。何もしたくない。そんなときが半年ほどあった。

メディアは盛んにがんを特集。それほどがん患者が急激に増加した時期でもあった。たくさんの本を読み、ネットで人の闘病記にも目を通した。そうしているとかか吹っ切れてきた。そこで気がついたのが自分の病気の経歴。「自分ほどのような経過で自分の病気と向き合ってきたのだろうか」。自分の病気の棚卸表を作ってみようと思いついた。身体の異変を感じてから現在までのストーリー。

一度書き出すと、面白いようにすらすらと書けた。「なんてだろう」。不思議な感じがした。多分、治療に対してどこかに不満が残っていたのではないか。そうでなければこんなにすらすらと書けるはずがないと思った。

治療に対して満足している患者は少ない。何かに不満を抱えながら、治療している。だから不満を吐き出すためにも病気の棚卸しは必要ではないか。纏めてみて、自分の治療はこれでよかったのだろうか。振り返る大切な機会を得ることができた。

私の場合、最高の病院へ行って最高の治療が出来なかった。地域格差がそうさせた。悔しい結果だったがそれが現在の活動に生かされている。もちろん自身自身の闘病記も公開している。

「学びから指導へ」教わるから教えるへ。こんな意識のギアチェンジが免疫となつてがん患者としてよりも、一人の活動家として自分を評価している。

妻が数年前、肺腺がんで左肺上葉部を摘出した。これから学んだことがいくつもある。

手術後、抗がん剤を打つことになった。地元の先生から抗がん剤の説明があった。スタンダードな単品治療の指示だった。私は不安を覚え、薬物療法専門医が近くに居るかどうかをネットや本から探

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイヤの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

妻の抗がん剤治療 専門医に直接予約

した。当時その専門医は全国で1期生が47名いた。ある新聞に広島赤十字原爆病院に1名の先生がいる事が判明した。早速電話した。

先生と話が出来、予約を取る事ができた。セカンドオピニオンだ。広島まで車で2時間、島根県益田市は出雲や松江に行くよりも近い。医療情報提供書やフィルム等を用意して、広島に向かった。

お会いしたのは若い女医D先生だった。非常に親切に説明を受けた。地方の医師でこのような対応はなかなか見かけない。D先生も遠方から名指しで来た患者を受けるのは初めてのことだったようだ。ついているときはこんなものだ。

D先生は即座に2種の抗がん剤治療を数例示された。それと同時にPETを受けてみないかと勧められた。当時患者仲間でもPETを経験した患者は少なかった。即座にお願いした。約3万円かかったが良かった。翌日結果が出るので広島で1泊した。凄いスピードで結果がでた。

D先生も遠方から来た私たち患者に対して配慮をして頂いた様だ。レベルの高い治療を地方でも出来る事を証明した。

広島から私がその治療方針を持って帰ってきた。こちらのM先生にそれを見せた。先生の顔を今でも覚えている。驚いた顔、忘れない。患者がこまめするとは思わなかったようだ。この行動は全国紙2紙に取り上げられた。さらに患者仲間と話したら、同じ行動をした患者も現れた。D先生とはその後経過観察ごとに情報を交換。妻はまた再入院。以前の抗がん剤は使えない。また勉強だ。

D先生にも当然相談した。イレッサ(経口剤)とタキソテール、ジエムザールのいずれかの選択だ。今回はイレッサを選んだ。数年前、多くの方が亡くなったイメージの悪い薬だが、あえてその薬を選んだ。今度は地元の先生とも意見は一致した。「がん」という病気はなかなか「完治」という言葉を使わせてくれない。厄介な病気だ。

外来での診察の時、入院して手術などを受ける時、詳細な告知を受けることがある。外来では診察室で、入院時ではカンファレンスルームなど別室で。いずれも良い話ではなく悪い話を聞くことが大半だ。

告知を受ける時はどのような準備がいるのだろうか。まず複数で、更に第三者

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

様々な選択ができる患者に

にも加わってもらおうほうが良い。

「ぼろ色のウソか、真っ暗な真実か」。貴方はどちらを選ぶか。告知を受ける時は録音やメモを十分に取る用意も必要。それを嫌がる医師は医師ではないと言っても過言ではない。説明時必ず看護師が立ち会う。それは医療側に立ってのこと。本来ならば患者側にも患者担当の看護師に立ち会ってもらおうほうがベストだ。

すると聴きそびれた事は後で立ち会っていた看護師に尋ねることが出来る。患者は安心して満足できるからだ。さらに告知の際にはいろいろな選択肢がある。例えば「どんな手術をしますか(2〜3種から選ぶ)」、「どんな抗がん剤を使いますか(どちらにしますか)」など。

選択するにあたり、買い物をする時の行動を振り返ってみよう。家を買う時、車を買う時は勿論のこと、洋服を買う時だって次のような行動をとる。自分に合う服は。何故その方法(手術)を進めるか。服のタイプが違う(治療方法が違う、気

に入らぬ)。ちょっとよその店で見えます(別の病院へ行ってきましたヘセカンド・オピニオン)。買ったけど取り替えて(手術は他の病院でします)。これいくら。(入院中の概算見積書がほしい)。

こんな感じのやり取りがあってもおかしくないでしょう。自分らしい生き方をするのなら、いろいろな選択が出来る患者にならなければいけない。選択肢には先へ進む時の選択肢と引く時の選択肢の2通りがあるが、後者の引く時の選択肢の方が意外と難しい。

私が体験した事として妻の治療の時、抗がん剤を良かれと思いつから次へと継続し投与した。後で感じたことだが、あの時止めておけばもっと長生きしたかもしれない。選択肢の失敗が私に大きな反省点を残した。

患者仲間には無理して抗がん剤は打たないほうがいいと言っている。止めるのもよし、中断するのもよし。いろいろな選択肢があることを知ってほしい。

複数の医師の意見を聞くことは自分自身の診療に自信と確信が持てるもの。主治医に遠慮しないで、自分の気持ちを伝えられる患者でありたい。

専門分野の医師を探すこと。それが生きる道である。例えば消化器外科、呼吸器外科、肝臓、すい臓、泌尿器科等。特に内科はたくさん専門分野にわかれて

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの横フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガリアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

情報収集はネットやメディアから

いるケースが多いので気をつけよう。専門分野を外れると分らないことが多い。では、どうしてその専門分野の医師を探し出すか

- 例) ネットを最大限に活用する(がん情報センター等多数ある)
- 患者同士の情報交換から選択する
- メディアから収集する
- 口コミから収集する

〈私たちの場合〉
私たち夫婦のセカンド・オピニオン実施例

東京築地がんセンターでのセカンドオピニオンと大阪成人病センターでの手術。

東京の親戚の医師の紹介で、訪問日の翌日にアポを取っていただいた。これはハイスピードな処置だ。本当は東京築地がんセンターで手術をしたかったが満床で5カ月待ち。そんなにゆっくりとはしてられない。東京から大阪への病院同志の連携もスムーズだった。

人には時に幸運と不運がある。ツイている時は全てが良いほうに回る。がんセンターを訪問してから大阪での手術まで1カ月もかからなかった。今生きているのはそのスピードによるものかもしれない。

〈妻の場合〉
手術後、抗がん剤をするに当たっての選択肢

妻が肺腺がんで左肺上葉部を摘出した。手術後、抗がん剤を打つことになった。地元の先生から抗がん剤の説明があった。スタンダードな単品治療の指示だった。不安を覚えた。

私はまず薬物療法専門医が近くに居るかどうかをネットや本から探した。当時その専門医は全国で1期生が47名居られた。ある新聞に広島赤十字原爆病院に1名の先生がいらっしやる事が判明した。早速電話した。大胆な行動だ。しかし患者の命がかかっている。躊躇は無用。(次号へ続く)